るうてるホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書

― 四條畷市岡山５丁目所在 ―

社会福祉法人 るうてるホーム（仮称）るうてるホーム新築工事
完成外観イメージ

平成２５（２０１３）年５月

四條畷市教育委員会

るうてるホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書

― 四條畷市岡山５丁目所在 ―

社会福祉法人 るうてるホーム（仮称）るうてるホーム新築工事
北側外観イメージ

平成２５（２０１３）年５月

四條畷市教育委員会

例　　言

1．　本書は、平成23（2011）年10月から12月にかけて実施した北口遺跡・讃良郡条里遺跡（KG・SGJ11－1）での、るうてるホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、四條畷市文化財調査報告の第48集である。
2．　発掘調査は、社会福祉法人るうてるホームからの依頼を受け、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3．　発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主幹　野島　稔の指導のもと、主査　村上　始・事務職員　實盛良彦（肩書はいずれも当時）を担当者とし実施した。
4．　発掘調査の実施にあたっては、社会福祉法人るうてるホーム・地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5．　発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

　大阪府教育委員会文化財保護課、櫻井敬夫氏、瀬川芳則氏（元関西外国語大学教授）、野島　稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐久間貴士氏（大阪樟蔭女子大学教授）。（順不同）
6．　出土遺物の整理・図面作成などは、四條畷市教育委員会社会教育課主任　村上　始、事務職員　實盛良彦が、酒井圭二、田伏美智代、船橋　勉の協力を得て行った。
7．　本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行った。文責者については、それぞれの文末に記載している。
8．　発掘調査で出土した遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．　本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。
2．　土色の色調は、1998年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3．　須恵器の編年については、田辺昭三のもの（田辺1981）と中村浩のもの（中村2001）を併記した。中世土器の編年は、中世土器研究会のもの（中世土器研究会編1995）に依拠した。

本　文　目　次

例　言・凡　例
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
　第１節　遺跡の位置と既往の調査
　第２節　周辺の歴史的環境
第２章　調査の経過 …… 8
　第１節　調査の経過
第３章　調査の成果 …… 10
　第１節　基本層序
　第２節　遺　　構
　第３節　出土遺物
第４章　まとめ …… 24
　第１節　調査のまとめ
参　考　文　献 …… 25
写　真　図　版
報　告　書　抄　録

挿　図　目　次

第１図　北口遺跡３次調査出土の樽形甕 …… 5
第２図　周辺遺跡分布図 …… 6
第３図　調査地区位置図 …… 8
第４図　調査地区配置図 …… 9
第５図　調査地区断面図（１）…… 11
第６図　調査地区断面図（２）…… 13
第７図　調査地区平面図 …… 15～16
第８図　出土遺物（１）…… 20
第９図　出土遺物（２）…… 22

写 真 図 版 目 次

写真図版１　１．調査前現況（南西側から）
　　２．調査状況（北側から）
写真図版２　１．東側地区上段・北部下段（南側から）
　　２．東側地区上段　全景（南側から）
写真図版３　１．東側地区北部下段　全景（南側から）
　　２．東側地区上段・北部下段　全景（北側から）
写真図版４　１．東側地区北部下段　全景（北側から）
　　２．東側地区南部下段　全景（南側から）
写真図版５　１．西側地区北部　全景（北側から）
　　２．西側地区北部　全景（北東側から）
写真図版６　１．西側地区北部　池　全景（南西側から）
　　２．西側地区南部　全景（西側から）
写真図版７　１．西側地区南部　全景（南西側から）
　　２．擁壁予定地　全景（北西側から）
写真図版８　出土遺物（１）

写真図版９　出土遺物（２）

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と既往の調査

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。北口遺跡・讃良郡条里遺跡は、この山系の西側の最低地部に位置する遺跡である。

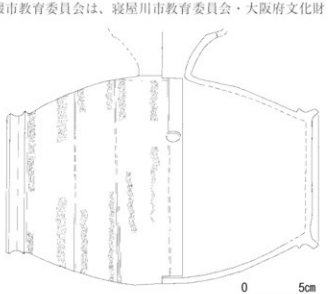
北口遺跡は、四條畷市岡山２丁目・５丁目に所在する古墳時代の集落跡である。この遺跡は1976年に今回の調査地の道路を挟んだ南東側の地点で宅地開発に伴って発見し、古墳時代の集落を調査した。1988年には集合住宅の建設に伴って２次調査を行い、古墳時代の集落を検出した。1999年にはマンション建設に伴って３次調査を行い、古墳時代中～後期の集落を検出した。この調査で溝から樽形鬲が出土している（第１図）。今回の調査は、北口遺跡の調査としては都合４次目に当たるものである。

讃良郡条里遺跡は、四條畷市北西部から寝屋川市南部にかけて広範囲に所在する、縄文時代から近世までの遺跡である。この地に旧条里制の区画が残されていることは古くから指摘されており、例えば平尾兵吾氏は昭和六年に「元讃良郡の條里制は、南から數へられて、甲可の南部は六條、中部は七條、北部は八條に當つて居る」と述べている（平尾1931）。讃良郡の条里制に関する研究史については、これまでの研究で詳細にまとめられているが（井藤2002）、このような既往の研究をもとに旧条里制区画が存する地域を示したのが、周知遺跡としての讃良郡条里遺跡である。

既往の発掘調査は、四條畷市教育委員会のほか、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、大阪府文化財センターによって行われている。最初の調査は1987年から1990年にかけて大阪府教育委員会によって行われ（橋本編1992、濱田1993）、これらの調査地付近はのちに長保寺遺跡として周知されて、その後寝屋川市教育委員会によっても調査が行われた（濱田1993）。

大阪府文化財センターによる、国道１号第二京阪道路の建設、およびその周辺地での開発に伴う調査では、多くの成果があがっている。遺跡の利用の始まりが縄文時代草創期末～早期前半にまで遡ることが明らかとなったほか（井上編2008）、弥生時代前期初頭の近畿地方最古級の弥生土器が、2005年の調査で縄文時代晩期の突帯文土器とともに出土した（中尾・山根編2009）。弥生時代以降この地では連綿と水田が営まれていたことが明らかとなり、条里制地割の施行が奈良時代に遡ることもわかった（中尾・山根編2009）。

2011年８月から2012年12月にかけて、四條畷市教育委員会は、寝屋川市教育委員会・大阪府文化財センターと合同で大型店舗建設に伴い発掘調査を行った。この調査では縄文時代晩期から近世までの各時代の遺構を層位的に検出した。現在整理中であるが、これまでに古墳時代の子持ち勾玉や奈良時代の海獣葡萄鏡などの出土が報道されている。これまでの調査で、この遺跡には縄文時代から近世にかけての集落跡も存することが明らかとなってきている。



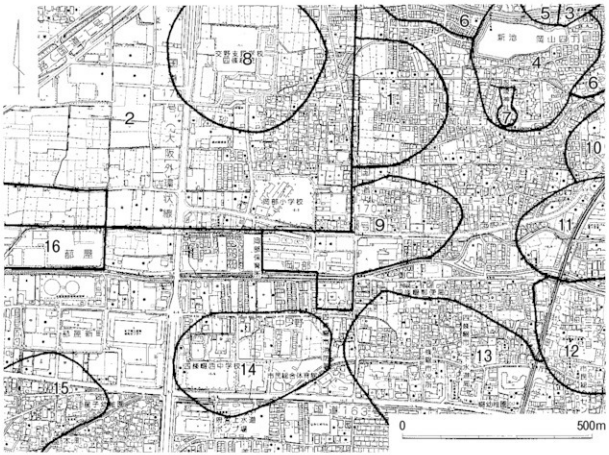
第１図　北口遺跡３次調査出土の樽形鬲

第２節　周辺の歴史的環境

北口遺跡・讃良郡条里遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物が見つかっている（第２図）。

旧石器時代

周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讃良川床遺跡があげられ、



第２図　周辺遺跡分布図

1．北口遺跡	2．讃良郡条里遺跡	3．讃良川床遺跡	4．更良岡山古墳群
5．讃良寺跡	6．更良岡山遺跡	7．忍岡古墳	8．砂遺跡
9．奈良田遺跡	10．忍ケ丘駅前遺跡	11．南山下遺跡	12．奈良井遺跡
13．中野遺跡	14．鎌田遺跡	15．蔀屋遺跡	16．蔀屋北遺跡

ハンドアックス・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している(櫻井1972)。

また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている(片山1967a)。

縄文時代

縄文時代草創期の有茎尖頭器が、南山下遺跡(野島1978)などで見つかっている。縄文時代中期の遺跡として南山下遺跡などがあげられる(野島1978、1988)。

砂遺跡では中期と晩期の集落跡が見つかっている(四條畷市教育委員会編2008)。集落内にはイノシシなどの動物の足跡が残されていた。晩期のものでは突帯文土器のほか、土偶等も出土している。

縄文時代後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡があげられる。ここでは北陸地方から搬入された大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧をはじめ、土偶・土製勾玉などの祭祀具、高坏形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した(片山1967b、桜井1972、野島編2000)。

弥生時代

弥生時代前期初頭の土器が、2005年の大阪府文化財センターによる調査で縄文時代晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡で見つかっている(中尾・山根編2009)。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示している。

明治44年に、四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸２口が出土したと伝えられる砂山銅鐸２口があり(梅原1985)、現在関西大学の所蔵となっている。一点は流水文を持つもので、もう一点は六区袈裟襷文を持つものである。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が５基見つかっている(野島1994)。１号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が１基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。２号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。

古墳時代

四條畷でもっとも古い古墳は、古墳時代前期中葉に築造された全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳である。昭和９年の室戸台風で忍陵神社が倒壊し、その建て直しの際に竪穴式石室が発見され、京都大学によって調査された(梅原1937)。すでに盗掘されていたが、碧玉製の車輪石・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片などが出土した。

中期になると、墓ノ堂古墳をはじめ、更良岡山古墳群などで次々と古墳が築造された。墓ノ堂古墳は全長約62mの前方後円墳で、発掘はなされていないが立会調査で円筒埴輪片が出土している(野島1997c、櫻井・佐野・野島2006、2010)。更良岡山古墳群は中期から後期まで継続する古墳群で、１号墳と２号墳が調査されている(野島1981)。１号墳は直径約18m、２号墳は直径約36mと想定される円墳で、そのうち２号墳は周溝の出土遺物から６世紀末の築造と考えられる。

形象埴輪は、古墳から出土するのが通常であるが、四條畷では集落遺跡からの出土が多く、中期に属するものが出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪(櫻井・佐野・野島2006、2010等)、南山下遺跡で馬形埴輪(野島1987b、c)、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している(野島1982)。なお、家形埴輪に伴って左足用の木製下駄が出土している(野島1979、1982)。古墳から出土した形象埴輪は、忍ヶ丘駅前１号墳での琴を弾く男性埴輪などがある(野島1993a、1997a)。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。馬は朝鮮半島から運ばれ、瀬戸内海、河内湖を経てこの地におろされたものと考えられる。古墳時代の四條畷は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方２㎞ほどで河内湖となる。飯盛山系から、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が馬の食料を育て自然の柵ともなり牧場に適した環境であった(野島1996c、1999)。鎌田遺跡では楽器のスリザサラや木鐸、祭具を載せる台が(村上2001a、b、c)、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している(野島1980、櫻井・佐野・野島2006、2010等)。大阪府教育委員会による蔀屋北遺跡の調査では大量の製塩土器、馬具の鐙・ハミ・鞍、準構造船をリサイクルした井戸枠、埋葬馬が完全な姿で出土している(岩瀬ほか編2010)。四條畷小学校内遺跡・中野遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し(村上2000等)、牧場を運営した渡来系の人々の存在を示している。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡が見つかっている(野島1993b、中尾・山根編2009等)。

古代以降

讃良寺跡は1969年に部分的に調査されており、白鳳期の創建であることが分かっている(桜井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010)。また、1997年の讃良川改修工事に伴う調査では、清滝にある正法寺跡のものと同笵の素弁八葉蓮華紋軒丸瓦が出土した(野島編2000)。讃良寺出土のものの文様は型に起因する摩耗がみられ、正法寺出土のものが先に作られたものと考えられる(野島1997b)。

平安時代には庶民生活が活発になったのか井戸が多く発見される。中野遺跡では「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物が出土し(村上2003)、岡山南遺跡では「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が井戸から出土している(野島1987a)。

現在忍岡古墳の後円部墳丘上には、延喜式神名帳に記載される式内社の忍陵神社が鎮座している。この神社は、もとは津桙神社という名称で、明治44年に付近の馬守神社と大将軍社を合祀し、現在の名称となった。四條畷市内では、他に御机神社と国中神社が式内社として挙げられる。

鎌倉時代では、坪井遺跡で鍛冶工房の跡が見つかっている(野島1996a、b)。工房跡では、鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が備わっていた。鎌５丁が残された工房もあった。

南北朝時代に四條畷では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

中野共同墓地には天文24(1555)年銘のある十三仏塔があり(山口1990)、四條畷で最も古い十三仏塔である。

(實盛良彦)

第２章　調査の経過

第１節　調査の経過

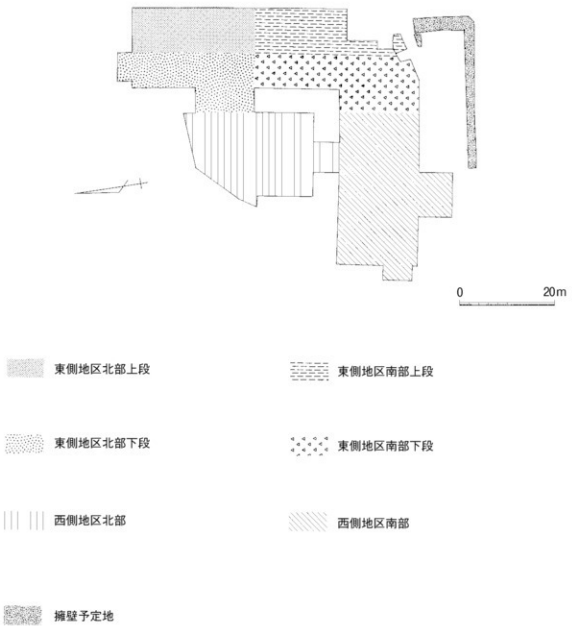
北口遺跡は、四條畷市岡山２丁目と５丁目に所在し、南北約350m・東西250mの範囲に広がる遺跡で、主に古墳時代の集落跡である。讃良郡条里遺跡は、四條畷市大字砂から寝屋川市南部にかけて南北約2.6㎞・東西1.3㎞の範囲に広がる遺跡で、縄文時代から近世までの遺跡であるとともに、古代の条里跡である。

平成11(1999)年には、今回の調査地区の南側でマンション建設に伴って発掘調査を行い、古墳期時代中期から後期の集落跡を確認した。

四條畷市岡山５丁目617番４・850番４において社会福祉施設の建設工事が計画され、その地域が周知遺跡である北口遺跡と讃良郡条里遺跡の範囲内であったため、平成23(2011)年９月28日付で、社会福祉法人るうてるホームから四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは平成23年10月24日付教委文第1-3108号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成23(2011)年10月３日に、開発地域内に６か所のトレンチを設定し確認調査を実施したところ、中世から近世の遺物と遺構を確認した。その結果をもって開発事業者と協議を行い、開発工事によって遺跡が破壊される建物予定地・防火水槽予定地・擁壁予定地の発掘調査を実施することとなった。調査面積は2,704㎡で、調査期間は平成23年10月24日から同年12月19日までであった。(第３図)

第３図　調査地区位置図



第４図　調査地区配置図

調査地区は、残土置き場を確保するため建物予定地を東西に２分割し、それぞれを東側地区・西側地区とし、それ以外を擁壁予定地区とした。建物予定地については、基本的に東西の地区を反転作業として実施した。そのなかで東側地区から調査を開始したところ、中央付近で約25㎝西側に低くなる段をもつ東西２枚の耕作地であることが判明した。その結果、作業の進捗状況を考慮して上段と下段の耕作地をそれぞれ南北に２分割して実施することとした(東側地区北部上段・南部上段、北部下段・南部下段)。西側地区に関しては、旧耕作地が１枚であったことから、ほぼ中央付近で南北に２分割して調査を実施することとした(西側地区北部、西側地区南部)。(第４図)。

調査は確認調査の結果から、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

(村上　始)

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

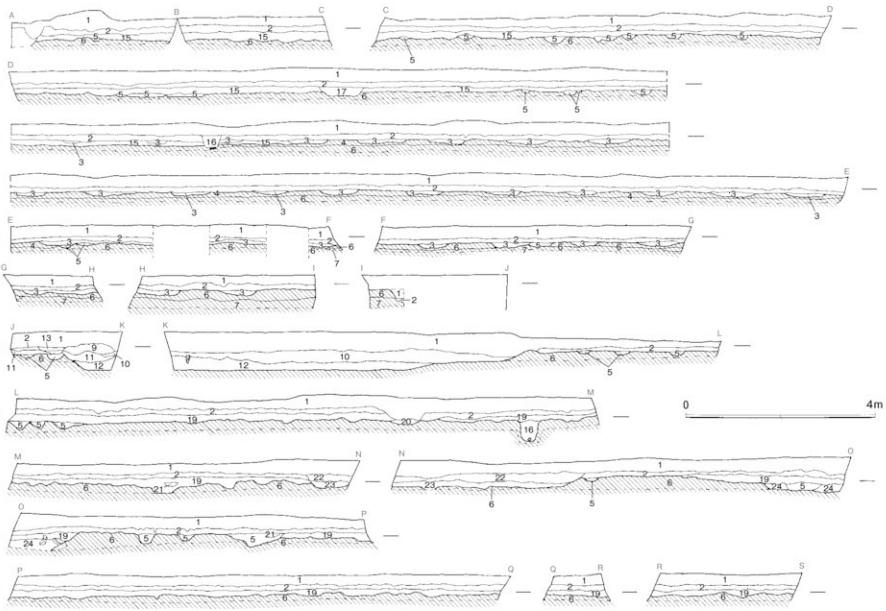
今回の発掘調査地区の現況は、南北に細長く、東から西へ向かって低くなる３枚の耕作地であった。確認調査をそれぞれの耕作地において１～３箇所のトレンチを設定して実施した結果、約30㎝の耕土と約10㎝の床土の下層において灰色系の砂質土層を確認した。これらは、中世から近世の包含層と考えられるものであった。その下層は、地山と考えられる灰色系の礫が混入する砂質土層や粘質土層であった。この上面が遺構面であり遺構を検出した。

以下、各土層の説明を述べる（第５・６図）。

（建物本体部分の断面土層説明）

Ａ～Ｓ（第５図）

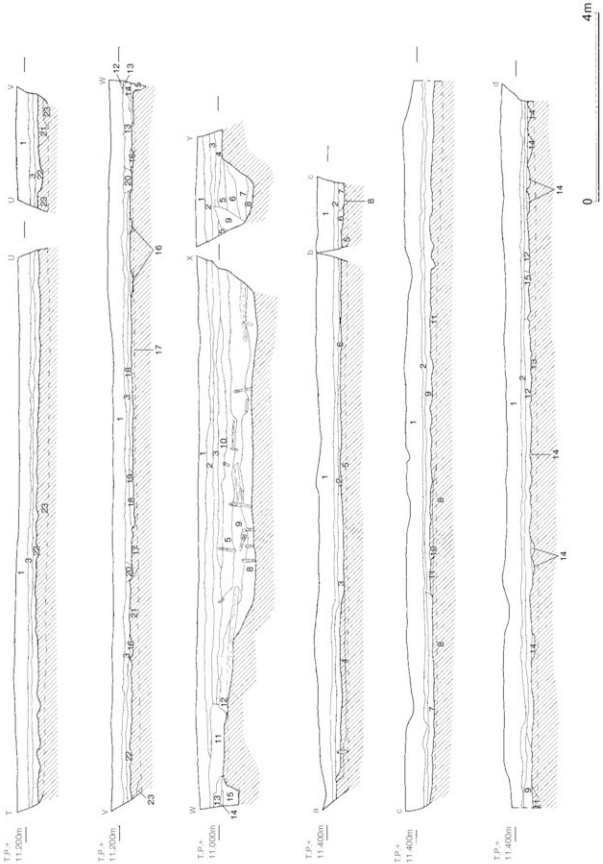
第１層：耕土Ａ
第２層：床土
第３層：明黄褐色粘土(10YR 7/6)に黒褐色砂質土混入(10YR 3/1)―鋤溝を切っていた近代の耕作溝。
第４層：灰黄褐色砂質土(10YR 5/2)に礫混入。
第５層：褐灰色砂質土(10YR 5/1)
第６層：褐灰色砂質土(10YR 4/1)に礫混入。
第７層：６層に明黄褐色砂質土(10YR 6/6)がブロック状に混入。
第８層：黄灰色砂質土(2.5Y 4/1)
第９層：灰色砂質土(N 5/)に灰白色細砂(5Y 8/2)が層状に混入。
第10層：暗青灰色砂質土(5B 4/1)に灰白色粗砂(5Y 8/2)が層状に混入。
第11層：灰色砂質土(N 6/)に灰白色細砂(5Y 8/2)と礫混入。
第12層：灰色砂質土(N 4/)
第13層：オリーブ黒色砂質土(7.5Y 3/1)
第14層：緑灰色砂質土(10GY 5/1)
第15層：灰黄褐色砂質土(10YR 5/2)に礫混入。
第16層：灰白色砂質土(N 6/)に耕土及び３層の明黄褐色粘土ブロック混入―竹を入れた溝。
第17層：15層に耕土が混入。
第18層：オリーブ灰色砂質土(2.5GY 6/1)
第19層：褐灰色砂質土(10YR 6/1)
第20層：灰白色粘質土(5Y 8/1)
第21層：淡黄色粗砂(5Y 8/3)
第22層：耕土Ｂ
第23層：灰色砂質土(N 6/)に粗砂混入。
第24層：褐灰色粘質土(10YR 5/1)



第５図　調査地区断面図（１）

Ｔ～Ｙ（第６図）
第１層：耕土Ａ
第２層：耕土Ｂ
第３層：床土
第４層：灰色砂質土(7.5Y 6/1)―池の堆積土。
第５層：緑灰色砂質土(10G 6/1)―池の堆積土。
第６層：青灰色粘質土(5BG 5/1)―池の堆積土。
第７層：暗青灰色粘質土(5B 4/1)―池の堆積土。
第８層：オリーブ灰色シルト(5GY 6/1)―池の堆積土。
第９層：灰色砂質土(7.5Y 5/1)に灰白色粗砂(5Y 7/1)と礫混入―池の堆積土。
第10層：黒褐色砂質土(10YR 3/1)が一部鉄分により赤変している―池の堆積土。
第11層：攪乱
第12層：青灰色シルト(5B 5/1)
第13層：灰色砂質土(7.5Y 6/1)
第14層：灰白色砂礫(5Y 7/1)
第15層：青灰色砂質土(5B 6/1)
第16層：褐灰色砂質土(10YR 5/1)―Ａ～Ｓ断面の５層と同じ。
第17層：灰白色シルト(5Y 7/2)―しまりは強い。
第18層：灰色砂質土(5Y 6/1)
第19層：灰色砂質土(5Y 5/1)
第20層：灰色砂質土(N 5/)
第21層：淡黄色粗砂(2.5Y 8/3)
第22層：褐灰色砂質土(10YR 6/1)
第23層：灰黄色砂質土(2.5Y 6/2)に礫混入。

（擁壁部分の断面土層説明）
ａ～ｄ（第６図）
第１層：耕土
第２層：床土
第３層：灰色砂質土(N 4/)―溝の埋土。
第４層：青灰色粗砂(10BG 5/1)に礫混入。
第５層：青灰色粗砂(10BG 6/1)に礫混入。
第６層：灰色砂質土(7.5Y 6/1)
第７層：青灰色砂質土(5PB 5/1)―竹入りの溝。
第８層：灰白色砂礫(N 7/)
第９層：灰黄色砂礫(2.5Y 6/2)
第10層：青灰色砂礫(10BG 6/1)
第11層：明青灰色砂礫(10BG 6/1)に礫混入。
第12層：灰色砂質土(N 5/)
第13層：灰色粘質土(N 5/)に礫混入。
第14層：褐灰色砂質土(10YR 6/1)
第15層：灰色砂質土(N 6/)



第６図　調査地区断面図（２）

第２節　遺構

今回の調査を開始するに当たり、この地の一部が讃良郡条里の東端に想定されていることから、それらに関連する遺構が確認できる可能性が考えられた。調査の結果、314基の遺構を確認した。その多くは鋤溝で、その他に耕作地に付随する細い竹を入れた暗渠排水溝や池を確認した。鋤溝の方向に関しては、概ね南北方向であった。耕作地という遺構の性格上、遺構の割合からすると遺物は少量であった。また、東側地区上段においては近代の耕作溝が浅く残っており、それらによって鋤溝が切られている箇所も見られた。

以下に遺物が出土した主な遺構について述べるが、これも耕作地という遺構の性格上、出土遺物の年代がそのままその遺構の年代を示すものではない可能性が高いことを述べておきたい。（第７図、写真図版１～７）

溝８　東側地区北部上段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は調査地区外に延びており、南端は途切れている。規模は長さ約4.26m、幅34～48㎝、深さ10.5～16.1㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋11.197m、北西肩部の上端はT.P.＋11.217m、底部はT.P.＋11.112m、南東肩部の上端はT.P.＋11.182m、南西肩部の上端はT.P.＋11.181m、底部はT.P.＋11.021mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、13世紀代の瓦器椀（第８図－１）である。

溝14　東側地区北部上段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は調査地区外に延びており、南端は他の鋤溝によって切られている。規模は長さ約10.34m、幅14～24㎝、深さ5.4～8.1㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋11.197m、北西肩部の上端はT.P.＋11.217m、底部はT.P.＋11.112m、南東肩部の上端はT.P.＋11.182m、南西肩部の上端はT.P.＋11.181m、底部はT.P.＋11.021mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、13世紀代の瓦器椀（第８図－２）である。

溝15　東側地区北部上段で検出した。形状は南北方向にほぼ直線的で、南北端ともに途切れている。規模は長さ約3.54m、幅22～24㎝、深さ4.8～5.6㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋11.157m、北西肩部の上端はT.P.＋11.152m、底部はT.P.＋11.101m、南東肩部の上端はT.P.＋11.132m、南西肩部の上端はT.P.＋11.129m、底部はT.P.＋11.084mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、江戸時代の瓦質土器短頸壺（第８図－３）である。

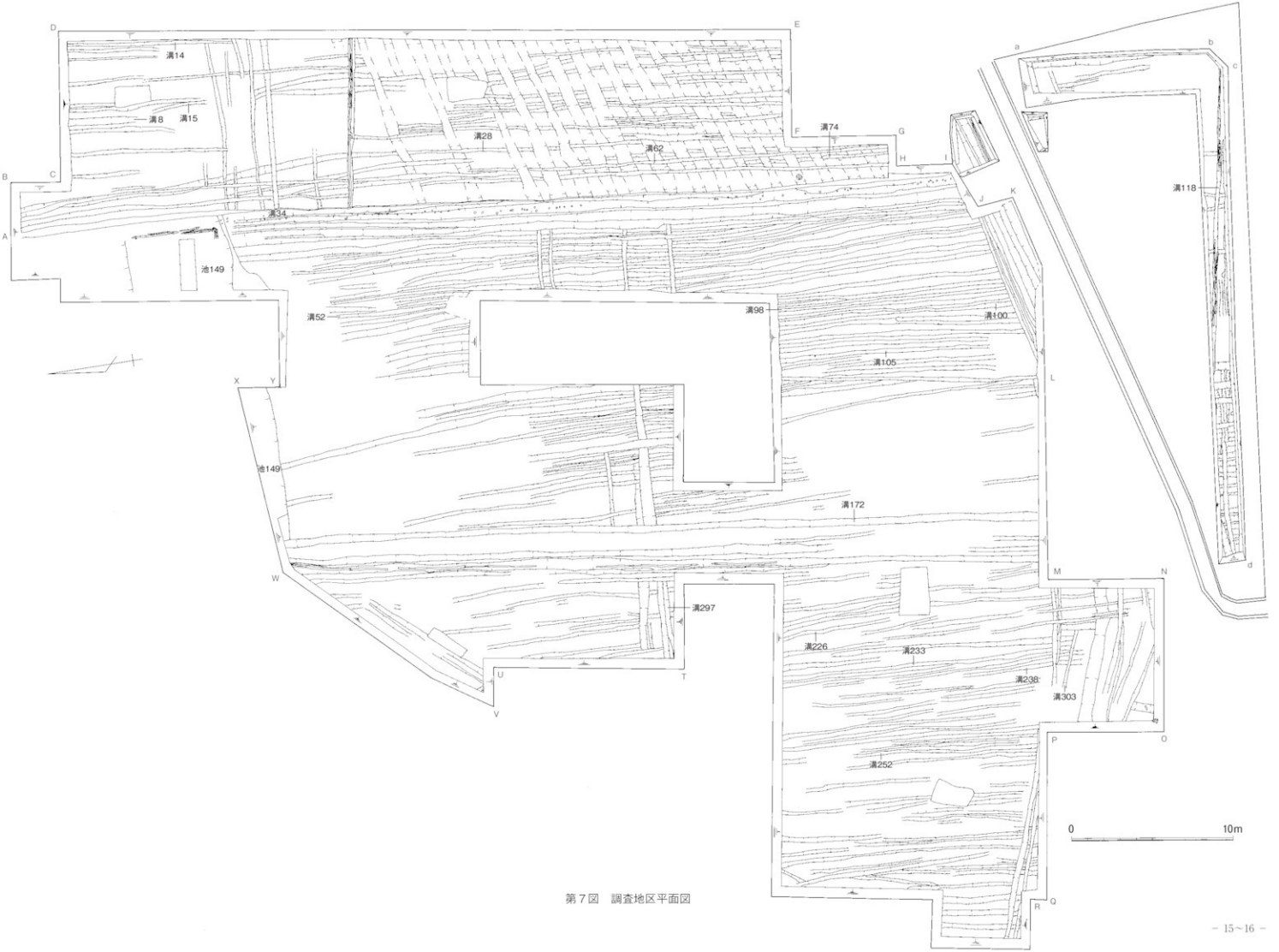
溝28　東側地区北部から南部上段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は他の鋤溝によって切られており、南端は途切れている。規模は長さ約30.8m、幅20～40㎝、深さ4.7～8㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋11.155m、北西肩部の上端はT.P.＋11.167m、底部はT.P.＋11.087m、南東肩部の上端はT.P.＋11.267m、南西肩部の上端はT.P.＋11.268m、底部はT.P.＋11.205mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、土師質土器深鉢（第８図－４）である。

溝34　東側地区北部下段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は池付近で途切れており、南端は耕作地の段によって切られている。この溝の東側の肩部は、耕作地を開拓する際に削られたものと思われる。規模は長さ約12.06m、幅50㎝以上、深さ2.4～5.1㎝である。北西肩部の上端はT.P.＋10.939m、底部はT.P.＋10.963m、中央付近南西肩部の上端はT.P.＋10.975m、底部はT.P.＋10.924mであった。出土遺物は、平安時代の須恵器坏蓋（第８図－５）である。

溝52　東側地区北部下段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は途切れており、南端は確認調査のトレンチによって撹乱されている。規模は長さ約6.94m、幅18～32㎝、深さ4.7～5.7㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋10.951m、北西肩部の上端はT.P.＋10.961m、底部はT.P.＋10.914m、南東肩部の上端はT.P.＋11.068m、南西肩部の上端はT.P.＋11.061m、底部はT.P.＋11.019mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、15世紀～17世紀前半の瓦質の奈良火鉢（第８図－６）である。

溝62　東側地区南部上段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は途切れており、南端は調査地区外に延びている。規模は長さ約26.28m、幅12～24㎝、深さ4.4～6.5㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋11.210m、北西肩部の上端はT.P.＋11.214m、底部はT.P.＋11.170m、南東肩部の上端はT.P.＋11.286m、南西肩部の上端はT.P.＋11.279m、底部はT.P.＋11.221mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、18世紀～19世紀中頃の肥前磁器瓶（第８図－７）である。

溝74　東側地区南部上段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は途切れており、南端は調査地区外に延びている。規模は長さ約8.86m、幅18～22㎝、深さ5.6～6㎝である。北東肩部の上端はT.P.＋11.230m、北西肩部の上端はT.P.＋11.222m、底部はT.P.＋11.170m、南東肩部の上端はT.P.＋


溝14
溝8
溝15
溝28
溝62
溝74
溝34
溝118
池149
溝52
溝98
溝100
溝105
池149
溝172
溝297
溝226
溝233
溝238
溝303
溝252
0
10m

第７図　調査地区平面図

11.279m、南西肩部の上端はT.P.＋11.270m、底部はT.P.＋11.223mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、７世紀後半の須恵器坏蓋(第８図－８)である。

溝98　東側地区南部下段で検出した。形状は南北方向に直線的で、南北端ともに調査地区外に延びている。規模は長さ約14.32m、幅14～22cm、深さ2.9～5.3cmである。北東肩部の上端はT.P.＋11.036m、北西肩部の上端はT.P.＋11.051m、底部はT.P.＋11.022m、南東肩部の上端はT.P.＋11.097m、南西肩部の上端はT.P.＋11.096m、底部はT.P.＋11.061mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、18世紀頃の肥前磁器皿(第８図－９)である。

溝100　東側地区南部下段で検出した。形状は南北方向に直線的で、南北端ともに調査地区外に延びている。規模は長さ約14.68m、幅12～34cm、深さ5.2～6.4cmである。北東肩部の上端はT.P.＋11.073m、北西肩部の上端はT.P.＋11.064m、底部はT.P.＋11.013m、南東肩部の上端はT.P.＋11.101m、南西肩部の上端はT.P.＋11.104m、底部はT.P.＋11.040mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、18世紀～19世紀の関西系陶器灯明皿(第８図－10)である。

溝105　東側地区南部下段で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は調査地区外に延びており、南端は途切れている。規模は長さ約13.1m、幅14～34cm、深さ5.0～6.2cmである。北東肩部の上端はT.P.＋11.075m、北西肩部の上端はT.P.＋11.062m、底部はT.P.＋11.013m、南東肩部の上端はT.P.＋11.123m、南西肩部の上端はT.P.＋11.122m、底部はT.P.＋11.073mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、江戸時代の関西系陶器鉢(第８図－11)である。

溝118　擁壁予定地区で検出した。形状は東西方向に直線的で、南北端ともに調査地区外に延びている。規模は長さ約16.96m、幅22～38cm、深さ7.4～17.5cmである。北肩部の上端はT.P.＋11.140m、南肩部の上端はT.P.＋11.147m、底部はT.P.＋10.965m、中央付近で北肩部の上端はT.P.＋11.055m、南肩部の上端はT.P.＋11.065m、底部はT.P.＋10.979mであった。耕作地に付随する細い竹枝を入れた暗渠排水溝と思われる。出土遺物は、江戸時代の瓦質土器深鉢(第８図－12)と鉄釉陶器天目碗(第８図－13)である。

溝172　西側地区の中央付近で検出した。形状は南北方向に直線的で、南北端ともに調査地区外に延びている。規模は長さ約46.38m、幅30～78cm、深さ35～38cmである。北東肩部の上端はT.P.＋10.978m、北西肩部の上端はT.P.＋10.980m、底部はT.P.＋10.625m、中央付近で東肩部の上端はT.P.＋10.960m、西肩部の上端はT.P.＋10.962m、底部はT.P.＋10.580m、南東肩部の上端はT.P.＋10.896m、南西肩部の上端はT.P.＋10.900m、底部はT.P.＋10.540mであった。耕作地に付随する細い竹を入れた暗渠排水溝と思われる。竹とその枝を入れており、溝118よりも本格的な施設である。北側で検出した池149への排水していたものと思われる。出土遺物は、17世紀後半の関西系陶器碗(第８図－14)、18世紀の肥前磁器碗(第８図－15)、肥前陶器刷毛目碗(第８図－16)、16世紀代の瓦質土器鍋(第８図－17)である。

溝226　西側地区の南側で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は調査地区外に延びており、南端は途切れている。規模は長さ約6.72m、幅18～26cm、深さ4.4～5.4cmである。北東肩部の上端はT.P.＋10.990m、北西肩部の上端はT.P.＋10.970m、底部はT.P.＋10.936m、中央付近で東肩部の上端はT.P.＋10.935m、西肩部の上端はT.P.＋10.926m、底部はT.P.＋10.891mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、18世紀後半の瀬戸美濃系鉄釉陶器天目碗(第８図－18)である。

溝233　西側地区の南側で検出した。形状は南北方向に直線的で溝303に切られており、北端は調査地区外に延びており、南端は他の溝によって切れている。規模は長さ約17.34m、幅18～36cm、深さ3.9～5.4cmである。北東肩部の上端はT.P.＋10.947m、北西肩部の上端はT.P.＋10.944m、底部はT.P.＋10.893m、中央付近で東肩部の上端はT.P.＋10.916m、西肩部の上端はT.P.＋10.930m、底部はT.P.＋10.880m、南東肩部の上端はT.P.＋10.927m、南西肩部の上端はT.P.＋10.924m、底部はT.P.＋10.888mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、おはじきと思われる陶器片(第８図－19)である。

溝238　西側地区の南側で検出した。形状は南北方向に直線的で溝303に切られており、南北端ともに途切れている。規模は長さ約7.32m、幅16～36cm、深さ3.2～6.6cmである。北東肩部の上端はT.P.＋10.920m、北西肩部の上端はT.P.＋10.927m、底部はT.P.＋10.895m、南東肩部の上端はT.P.＋10.955m、南西肩部の上端はT.P.＋10.960m、底部はT.P.＋10.894mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、18世紀末頃の肥前磁器筒形碗(第８図－20)である。

溝252　西側地区の西側で検出した。形状は南北方向に直線的で、北端は途切れており、南端は調査地区外に延びている。規模は長さ約11.26m、幅14～32cm、深さ1.7～5.1cmである。北東肩部の上端はT.P.＋10.920m、北西肩部の上端はT.P.＋10.920m、底部はT.P.＋10.903m、南東肩部の上端はT.P.＋10.961m、南西肩部の上端はT.P.＋10.960m、底部はT.P.＋10.910mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、18世紀前半の瀬戸美濃系鉄釉陶器天目碗(第８図－21)である。

溝297　西側地区の中央付近で検出した。形状は東西方向に直線的で、東端は他の溝に切られており、南端は調査地区外に延びている。規模は長さ約4.86m、幅24～32cm、深さ2.0～3.5cmである。中央付近の北肩部の上端はT.P.＋10.878m、南肩部の上端はT.P.＋10.981m、底部はT.P.＋10.946mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、おはじきと思われる瓦質土器片(第８図－22)である。

溝303　西側地区の南側で検出した。形状は東西方向に直線的で溝233と溝238を切っており、東端は調査地区外に延びており、西端は途切れている。規模は長さ約6.16m、幅16～30cm、深さ3～8.1cmである。北東肩部の上端はT.P.＋10.945m、南東肩部の上端はT.P.＋10.938m、底部はT.P.＋10.915m、中央付近で北肩部の上端はT.P.＋10.924m、南肩部の上端はT.P.＋10.910m、底部はT.P.＋10.859m、北西肩部の上端はT.P.＋10.965m、南西肩部の上端はT.P.＋10.977m、底部はT.P.＋10.896mであった。鋤溝と思われる。出土遺物は、おはじきと思われる瓦質土器片(第８図－23)である。

池149　東側地区北部下段の北端から西側地区の北端にかけた地域で検出した。そのほとんどは調査地区外に広がっているため、全体の形状は不明である。今回検出できたのは池の南側の堤にあたる一部で、近代に埋戻した際に大きく撹乱を受けていたため完掘を断念した。確認できた規模は長さ約15.12m、幅18m、深さ64.8cmである。東肩部の上端はT.P.＋10.916m、底部はT.P.＋10.808m、中央付近の肩部の上端はT.P.＋10.959m、底部はT.P.＋10.311m、西肩部の上端はT.P.＋10.926m、底部はT.P.＋10.323mであった。農業用水用の溜池と思われる。出土遺物は、17世紀後半の肥前磁器碗(第９図－24)、18世紀後半の肥前磁器碗(第９図－25・26)、1780年～19世紀前半の肥前磁器広東碗蓋(第９図－27)、18世紀～19世紀の陶器灯明皿(第９図－28)、19世紀初頭～幕末の肥前磁器神酒徳利(第９図－29)、19世紀後半の瀬戸焼端反碗(第９図－30)、19世紀前半～中頃の堺焼擂鉢(第９図－31・33)、17世紀中頃の信楽焼擂鉢(第９図－32)、瓦を転用した錘と思われる瓦片(第９図－34)である。

第３節　出土遺物

1．遺構出土遺物

溝８

1　瓦器碗　底径：5.2cm(復元)。器高：0.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は暗灰色(N 3/)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。大和型Ⅲ－Ｃ段階。13世紀代のものである。(第８図－１・写真図版８－１)

溝14

2　瓦器碗　口径：12.0cm(復元)。器高：2.3cm(残存)。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外面は暗灰色(N 3/)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。楠葉型Ⅲ－２段階。13世紀前半のものである。(第８図－２・写真図版８－２)

溝15

3　瓦質土器短頸壺　口径：12.0cm(復元)。器高：4.6cm(残存)。厚さ：0.5～1.0cm。色調：内・外面は暗灰色(N 3/)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：密。直径１㎜以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。江戸時代のものである。(第８図－３・写真図版８－３)

溝28

4　土師質土器深鉢　口径：36.4cm(復元)。器高：3.8cm(残存)。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)、外面は褐灰色(10YR 4/1)。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に煤が付着している。(第８図－４・写真図版８－４)

溝34

5　須恵器坏蓋　口径：15.2cm(復元)。器高：1.0cm(残存)。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外・断面は灰白色(N 7/)、口縁部外面は灰色(N 5/)。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。平安時代のものである。(第８図－５・写真図版８－５)

溝52

6　瓦質土器火鉢　口径：17.2cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.7～0.9cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。15世紀～17世紀前半の奈良火鉢と思われる。（第８図－６・写真図版８－６）

溝62

7　肥前磁器瓶　底径：5.0cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・断面は灰白色（N 8/）、外面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。畳付部に砂目がみられる。18世紀～19世紀中頃のものである。（第８図－７・写真図版８－７）

溝74

8　須恵器坏蓋　口径：11.2cm（復元）。器高：1.8cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内面は灰白色（N 7/）、外・断面は灰白色（N 6/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。Ⅲ型式１段階（ＴＫ217型式）。7世紀後半のものである。（第８図－８・写真図版８－８）

溝98

9　肥前磁器皿　底径：8.0cm（復元）。器高：1.9cm（残存）。厚さ：0.5～0.8cm。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の釉薬は風化している。18世紀頃のものである。（第８図－９・写真図版８－９）

溝100

10　陶器灯明皿　口径：5.4cm（復元）。底径：2.0cm（復元）。器高：2.0cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内面は明赤褐色（5YR 5/6）、外・断面は橙色（5YR 6/6）。胎土：密。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/6。内面に透明釉が掛けられている。関西系陶器と思われる。18世紀～19世紀のものである。（第８図－10・写真図版８－10）

溝105

11　陶器鉢　器高：3.2cm（残存）。厚さ：0.5～1.1cm。色調：内面は明赤褐色（5YR 5/6）、外・断面は橙色（5YR 6/6）。胎土：密。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/6。江戸時代のものである。関西系陶器と思われる。（第８図－11・写真図版８－11）

溝118

12　瓦質土器深鉢　口径：24.6cm（復元）。器高：7.4cm（残存）。厚さ：0.6～0.7cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。江戸時代のものである。（第８図－12・写真図版８－12）

13　鉄釉陶器天目碗　口径：10.0cm（復元）。器高：3.4cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内・外面は灰黄褐色（10YR 4/2）、断面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。江戸時代のものである。（第８図－13・写真図版８－13）

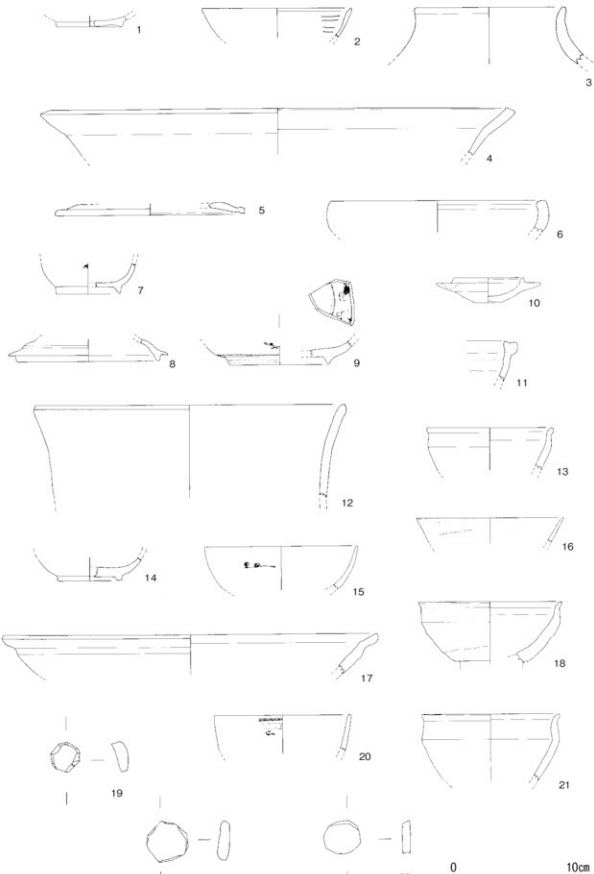
溝172

14　陶器碗　底径：5.0cm（復元）。器高：1.9cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。17世紀後半のものである。関西系陶器と思われる。（第８図－14・写真図版８－14）

15　肥前磁器碗　口径：12.2cm（復元）。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 7/1）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。コバルトの発色が悪い。体部外面に草花文が描かれている。18世紀のものである。（第８図－15・写真図版８－15）

16　肥前陶器刷毛目碗　口径：11.8cm（復元）。器高：2.0cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外・断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に灰オリーブ色（5Y 5/2）の刷毛目文が描かれている。（第８図－16・写真図版８－16）

17　瓦質土器鍋　口径：30.0cm（復元）。器高：3.2cm（残存）。厚さ：0.6～0.8cm。色調：内・断面は灰白色（N 8/）、外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒と石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。16世紀代のものである。（第８図－17・写真図版８－17）



第８図　出土遺物（１）

溝226

18 瀬戸美濃系鉄釉陶器天目碗　口径：11.6cm(復元)。器高：4.9cm(残存)。厚さ：0.2～1.0cm。色調：内・外面は黒褐色(10YR 2/2)、断面は灰白色(2.5Y 8/1)。露胎部は灰白色(10YR 8/2)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。内外面ともに釉薬にムラがみられる。18世紀後半のものである。(第８図－18・写真図版８－18)

溝233

19 陶器片　最大長：2.4cm。最大幅：2.4cm。厚さ：0.6～1.0cm。色調：内面はにぶい黄橙色(10YR 6/3)、外面はにぶい黄橙色(10YR 7/3)、断面は浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。おはじきと思われる。(第８図－19・写真図版８－19)

溝238

20 肥前磁器筒形碗　口径：11.0cm(復元)。器高：3.0cm(残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は灰白色(7.5Y 7/1)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に雷文が描かれている。18世紀末頃のものである。(第８図－20・写真図版８－20)

溝252

21 瀬戸美濃系鉄釉陶器天目碗　口径：11.0cm(復元)。器高：5.3cm(残存)。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外面は黒褐色(7.5YR 7/1)、断面は灰白色(2.5Y 8/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。18世紀前半のものである。(第８図－21・写真図版８－21)

溝297

22 瓦質土器片　最大長：3.2cm。最大幅：3.3cm。厚さ：0.7～0.9cm。色調：内面は灰色(N 6/)、外面は灰色(N 4/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。おはじきと思われる。(第８図－22・写真図版８－22)

溝303

23 瓦質土器片　最大長：2.6cm。最大幅：3.0cm。厚さ：0.6cm。色調：内・外面は灰色(N 6/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。直径１㎜以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。おはじきと思われる。(第８図－23・写真図版８－23)

池149

24 肥前磁器碗　底径：6.0cm(復元)。器高：2.8cm(残存)。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外面は明緑灰色(10GY 8/1)、断面は灰色(N 8/)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に一重網目文が描かれている。17世紀後半のものである。(第９図－24・写真図版９－24)

25 肥前磁器碗　口径：12.0cm(復元)。器高：4.5cm(残存)。厚さ：0.3～1.0cm。色調：内・外面は明緑灰色(10GY 8/1)、断面は灰色(N 8/)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。18世紀後半のものである。(第９図－25・写真図版９－25)

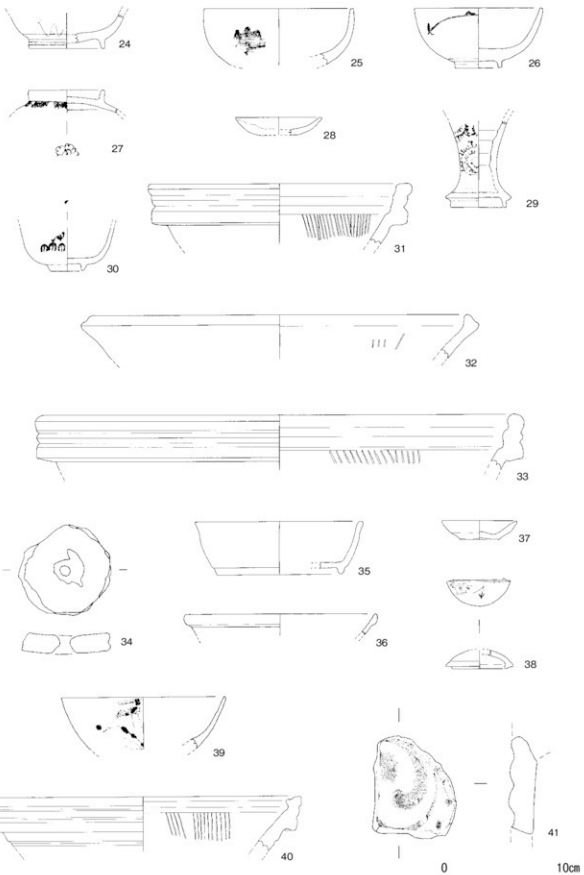
26 肥前磁器碗　口径：10.4cm(復元)。底径：3.6cm。器高：4.8cm。厚さ：0.3～1.0cm。色調：内・外面は灰白色(7.5Y 8/1)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。見込部は蛇の目釉はぎを施している。体部外面に草花文が描かれている。18世紀後半のものである。(第９図－26・写真図版９－26)

27 肥前磁器広東碗蓋　底径：6.0cm(復元)。器高：1.8cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は明緑灰色(10GY 8/1)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/4。1780年～19世紀前半のものである。(第９図－27・写真図版９－27)

28 陶器灯明皿　口径：7.0cm(復元)。器高：1.4cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内面は灰白色(2.5Y 7/1)、外・断面は灰色(5Y 5/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。内面と口縁部外面に灰釉が掛けられている。18世紀～19世紀のものである。関西系陶器と思われる。(第９図－28・写真図版９－28)

29 肥前磁器神酒徳利　底径：4.4cm。器高：6.9cm(残存)。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内・断面は灰白色(N 8/)、外面は明緑灰色(10GY 8/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3 。体部外面に蛸唐草文が描かれている。19世紀初頭～幕末のものである。(第９図－29・写真図版９－29)

30 瀬戸焼端反碗　底径：2.6cm(復元)。器高：3.5cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は灰白色(N 8/)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/4 。体部外面にヤマキズがみられる。



第９図　出土遺物（２）

19世紀後半のものである。（第９図－30・写真図版９－30）

31 堺焼擂鉢　口径：20.8cm（復元）。器高：4.8cm（残存）。厚さ：0.8～1.7cm。色調：内・外・断面は赤橙色（10R 6/6）、口縁部外面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：密。直径１㎜の砂粒を少量、小石を極少量含む。焼成：良好。残存度：小片。19世紀前半～中頃のものである。（第９図－31・写真図版９－31）

32 信楽焼擂鉢　口径：30.0cm（復元）。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.7～1.2cm。色調：内・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/3）、外面は灰褐色（7.5YR 6/2）。胎土：密。直径１㎜の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。17世紀中頃のものである。（第９図－32・写真図版９－32）

33 堺焼擂鉢　口径：38.0cm（復元）。器高：4.4cm（残存）。厚さ：1.0～1.9cm。色調：内・断面は赤色（10R 5/6）、外面は暗赤褐色（10R 3/2）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。19世紀前半～中頃のものである。（第９図－33・写真図版９－33）

34 瓦片　最大長：7.2cm。最大幅：7.4cm。厚さ：1.4～1.5cm。色調：凹面は暗灰色（N 3/）、凸・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：完形。瓦を転用した錘と思われる。（第９図－34・写真図版９－34）

２．包含層出土遺物

35 須恵器坏　口径：13.2cm（復元）。底径：10.0cm（復元）。器高：4.2cm。厚さ：0.4～0.5cm。色調：内・断面は灰白色（N 7/）、外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/6。８世紀末～９世紀初頭のものである。（第９図－35・写真図版９－35）

36 白磁碗　口径：15.4cm（復元）。器高：1.7cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は灰白色（5Y 7/2）、断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。11世紀後半～12世紀前半のものである。（第９図－36・写真図版９－36）

37 瀬戸美濃系鉄釉陶器小皿　口径：6.0cm（復元）。底径：3.0（復元）。器高：1.5cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内面は黒褐色（10YR 3/2）、外・断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/4。底部外面に回転糸切痕がみられる。16世紀代のものと思われる。（第９図－37・写真図版９－37）

38 肥前磁器合子蓋　口径：4.2cm（復元）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/2 。体部外面の釉薬が風化している。体部外面には松葉文が描かれている。18世紀代のものである。（第９図－38・写真図版９－38）

39 肥前磁器碗　口径：13.0cm（復元）。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 7/1）、断面は灰白色（7.5Y 8 /1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に草花文が描かれている。17世紀後半のものである。（第９図－39・写真図版９－39）

40 備前焼擂鉢　口径：25.4cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.9～1.7cm。色調：内・外面は灰赤色（2.5YR 5/2）、断面はにぶい赤褐色（2.5YR 5/4）。胎土：密。直径１㎜以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。18世紀前半～中頃のものである。（第９図－40・写真図版９－40）

41 巴文軒丸瓦　長さ：8.2cm（残存）。幅：6.7cm（残存）。厚さ：1.3～2.1cm。色調：凹凸面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径１㎜以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。（第９図－41・写真図版９－41）

（村上）

第４章　まとめ

第１節　調査のまとめ

北口遺跡は、四條畷市岡山２丁目・５丁目に所在する南北約350m・東西250mの範囲に広がる遺跡である。過去の３次の発掘調査の結果、古墳時代中期から後期の集落跡であることが判明している。また、讃良郡条里遺跡は、四條畷市大字砂から寝屋川市南部にかけて南北約2.6㎞・東西1.3㎞の範囲に広がる縄文時代から近世までの遺跡であるとともに、古代からの讃良郡の旧条里制の区画が残されていることは古くから指摘されている。

今回の調査地区の南側においては、平成11(1999)年にマンション建設に伴う発掘調査を行ったところ、古墳期時代中期から後期の集落跡を確認している。

そのような状況下で、今回の場所において社会福祉施設の建設工事が計画されたことから、確認調査を実施するに当たり、古墳時代の集落跡とこの地の一部が讃良郡条里の東端に想定されていることから、それらに関連する古代の遺構が存在する可能性が考えられた。

平成23(2011)年10月３日に、開発地域内に６か所のトレンチを設定し確認調査を実施したところ、中世から近世の遺物と遺構を確認した。この確認調査では、当初想定していた古墳時代と古代の遺跡を確認することはなかったが、中世の遺構が存在していることが判明した。しかし、広大な敷地であったため古墳時代と古代の遺構が残存していることを念頭に置くとともに、今回の調査地区が南北側と東側の隣接地から一段低い場所にあたるという立地条件から居住空間以外の遺構の存在も考えて発掘調査を進めていくこととした。

発掘調査で確認した遺構に関しては、第３章第２節で詳細を述べたとおり、314基の遺構を確認した。その大半が農地の耕作による鋤溝で、そのほかに耕作地に付随する施設を確認した。その一つは、３か所で検出した耕作地に溜まる水を排水するための暗渠排水溝で、この溝の底には排水機能の効率を高めるために細い竹や竹枝を敷き詰めていた。二つは、農業用水用の溜池を確認した。この池に関しては、出土遺物から見ると少なくとも江戸時代には存在しており、地元住民の聞き取りから昭和の中頃まで存在していたことが判明した。耕作地は、鋤溝の方向が概ね南北方向であったことから、現況と同じ南北方向に長い耕作地であったと考える。ただし、現況では３枚の耕作地であったが、当初は１枚の面積が広い棚田状の２枚の耕作地で、その段下には溝を掘り、段を補強するための数十本の杭がほぼ等間隔に打たれていた。また、それぞれの遺構から出土した遺物については、第３章第３節で詳細を述べたとおり、そのほとんどが耕作地という遺構の性格上、遺構の割合からすると遺物は少量であった。遺構から出土した遺物の時期を見ると７世紀(飛鳥時代)・８世紀～９世紀(平安時代)・13世紀(鎌倉時代)・16世紀(室町時代)・17世紀～19世紀(江戸時代)のものがみられ、遺物包含層からも同じ時期の遺物が出土している。ただし、第３章第２節で詳細を述べたとおり、耕作に伴う鋤溝という遺構の性格上、出土遺物の年代がそのままその遺構の年代を示すものではない可能性が高いと考える。その上で、耕作土が離れた場所から搬入されたとも考えにくいことから、本来はこの場所か若しくは周辺にこの時代の遺跡が存在しており、それらの遺物が混入した可能性が考えられる。ただし中には、遺物の出土状態から鎌倉時代のものと判断できるものがあった。

以上、今回の発掘調査でこの地域は、少なくとも鎌倉時代には耕作地として利用されはじめて、江戸時代には農業用水用の溜池を作るなど耕作地の拡充がなされ、現代まで続いていたと考える。そして、今回の調査地区の南・北・東側の一段高い場所が、その当時の居住空間であったと考える。中世以前の時代に関しては、今回の調査では讃良郡条里に関する遺構は確認しなかった。その理由の一つとしては、中世以降の開拓により破壊された可能性をあげておきたい。また、古墳時代については、以前の周辺地域の調査で南側の一段高い場所に居住空間があったことが判明している。

最後に、今回の調査地区については、遺構の記録調査が完了したのちにそれぞれの地区において下層を確認するためトレンチ調査を実施したところ、東側地区においては暗灰色系の砂質土から数点の土器小片が出土し、その下層では自然流路状のものを確認したが遺物は含まれていなかった。また、西側地区と擁壁予定地においてはそのほとんどが砂層で湧水がみられた。このことから、中世以前については、この地域の立地も含めて遺構の希薄な場所であったと考える。　　(村上)

参考文献

井藤暁子2002「讃良郡条里について」『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』財団法人大阪府文化財センター。

井上智博編2008『讃良郡条里遺跡』Ⅵ、財団法人大阪府文化財センター。

岩瀬　透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編2010『部屋北遺跡』Ⅰ、大阪府教育委員会。

岩瀬　透編2012『部屋北遺跡』Ⅱ、大阪府教育委員会。

梅原末治1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第４、日本古文化研究所。

梅原末治1985『銅鐸の研究』木耳社。

片山長三1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。

片山長三1967b「縄文時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。

櫻井敬夫1972「考古学」『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。

櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。

櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。

四條畷市教育委員会編2008『ひとつぶの籾』第23回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店。

中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社。

中尾智行・山根　航編2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。

中村　浩2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』美蓉書房出版。

野島　稔1978「南山下遺跡」『まんだ』第５号、まんだ編集部。

野島　稔1979「岡山南遺跡出土の古代下駄」『まんだ』第８号、まんだ編集部。

野島　稔1980「四條畷市奈良井遺跡（２）」『まんだ』第９号、まんだ編集部。

野島　稔1981「更良岡山古墳群発掘調査概要」四條畷市教育委員会。

野島　稔1982「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅱ、四條畷市教育委員会。

野島　稔1987a「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅳ、四條畷市教育委員会。

野島　稔1987b「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第30号、まんだ編集部。

野島　稔1987c「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第30号、まんだ編集部。

野島　稔1988「四條畷市“南山下遺跡”」『まんだ』第35号、まんだ編集部。

野島　稔1993a「四條畷市忍ケ丘駅前遺跡」『まんだ』第49号、まんだ編集部。

野島　稔1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第50号、まんだ編集部。

野島　稔1994「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第51号、まんだ編集部。

野島　稔1996a「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第57号、まんだ編集部。

野島　稔1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第58号、まんだ編集部。

野島　稔1996c「過激な馬のまつり」『図説・北河内の歴史』郷土出版社。

野島　稔1997a「五絃の琴」『まんだ』第60号、まんだ編集部。

野島　稔1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」『まんだ』第62号、まんだ編集部。

野島　稔1997c『はにわはともだち』第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。

野島　稔1999「馬がやってきた」第14回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。

野島　稔編2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。

橋本高明編1992『讃良郡条里遺跡発掘調査概要』Ⅲ、大阪府教育委員会。

濱田延充1993『長保寺遺跡』寝屋川市教育委員会。

平尾兵吾1931『北河内史踏史話』（1973年増補再刊）。

福佐美智子・小林千夏編2010『讃良郡条里遺跡』X、財団法人大阪府文化財センター。

村上　始2000『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。

村上　始2001a「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。

村上　始2001b「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。

村上　始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。

村上　始2003「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。

森本　徹編2009『讃良郡条里遺跡』Ⅸ、財団法人大阪府文化財センター。

山口　博編1972『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。

山口　博1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。

1．調査前現況（南西側から）

2．調査状況（北側から）

1．東側地区上段・北部下段　全景（南側から）

2．東側地区上段　全景（南側から）

1．東側地区北部下段　全景（南側から）

2．東側地区上段・北部下段　全景（北側から）

1．東側地区北部下段　全景（北側から）

2．東側地区南部下段　全景（南側から）

1．西側地区北部　全景（北側から）

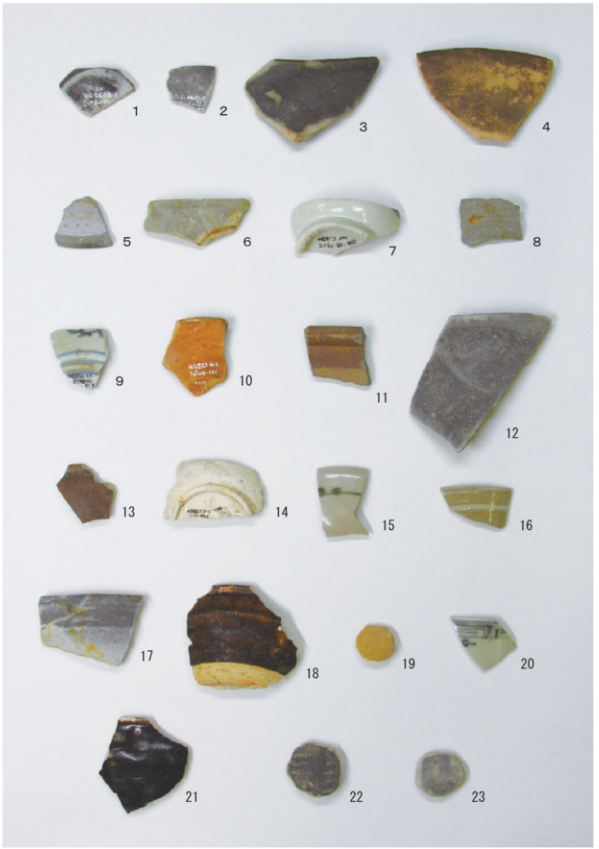
2．西側地区北部　全景（北東側から）

1．西側地区北部　池　全景（南西側から）

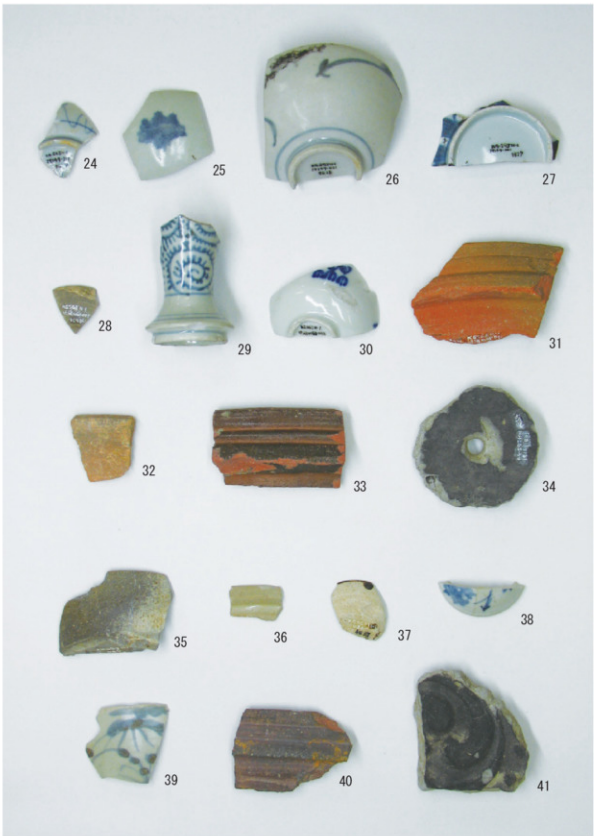
2．西側地区南部　全景（西側から）

1．西側地区南部　全景（南西側から）

2．擁壁予定地　全景（北西側から）



出土遺物（1）



出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたぐちいせき・さらぐんじょうりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書
副書名	るうてるホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第48集
編著者名	村上　始・實盛 良彦
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号
発行日	2013（平成25）年５月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きたぐちいせき・ さらぐんじょうりいせき 北口遺跡・讃良郡条里遺跡（11－1）	しじょうなわてし おかやまごちょうめ 四條畷市 岡山五丁目	272299	34° 74′ 80″	135° 63′ 77″	平成23年 10月24日 ～ 平成23年 12月19日	2704㎡	社会福祉施設 建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北口遺跡・讃良郡条里遺跡（11－1）	集落跡	中世、近世	溝、鋤溝、池	瓦器、瓦質土器、おはじき（陶器・瓦質）、須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦	鎌倉時代から利用され始める耕作地を検出

北口遺跡・讃良郡条里
遺跡発掘調査報告書

平成25年５月発行

編　集　四條畷市教育委員会
発　行　四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町１－１
印　刷　川西軽印刷株式会社